

巾着田と高麗郷歴史ウォーク



散歩以上万歩未満の会 秋の「お花見」

いつまで生きる 曼殊沙華咲きだした (種田山頭火)

秋のお花見は、埼玉県日高市の巾着田。およそ500万本という日本一の曼殊沙華群生地として人気の観光スポットです。巾着田という地名の由来は、高麗川が大きく蛇行し、まるで巾着のような地形となり、そこに水田がつくられたことにあります(観光地図をご覧ください)。

そして、ここは、716年から1896(明治29)年まで、武蔵国高麗郡でした。その地名でわかるように、唐・新羅によって滅ぼされた高句麗からの渡来人が、大和朝廷の意向を受け、この地に移住し、開拓・開墾して、「新世界」を築いていったのです。

『続日本紀』の霊龜二年(716年)五月十六日の記述に、<駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七ヵ国にいる高麗人千七百九十五人を武蔵国に移住させ、初めて高麗郡を置いた>(現代語訳・宇治谷孟／講談社学術文庫)とあります。

ところで、曼殊沙華の群生は、高麗郡当時からあったわけではありません。竹下登政権のとき、「ふるさと創生」といって市町村に1億円を交付したことを覚えているでしょう。日高市はそれを基金として、歴史遺産の整備とともに、荒れ果てた草藪だった「巾着田」の草刈りをしたところ、予想外に大きな規模の曼殊沙華の姿が見られるようになったのです。それを大事に育てていった努力の結晶が、息を飲む美しさと絶賛されるこの「魅惑の花園」なのです。

曼殊沙華(彼岸花)の満開時期は、夏の気温に左右されるようで、かつては9月20日頃が

見ごろでした(文字通り彼岸花)が、猛暑の8月だった昨年は、9月30日から10月5日が見ごろだったようです。今年の夏も真夏日が多く、開花は遅くなるだろうと予測して、10月3日(金)に訪れることにしました。

歩きつづける 曼殊沙華咲きつづける (山頭火は曼殊沙華の句をいくつも創っています)

<行程> 池袋からは、11時30分発の特急ちちぶ13号(特急券600円)が最速・最適です。

10月3日(金)13:00西武池袋線高麗駅集合⇒徒歩15分(途中「台の高札場跡」)⇒巾着田曼殊沙華公園(1時間ほど散策および休憩:民俗資料館)徒歩5分⇒高麗郷古民家

★足に自信のない方のために、**ハーフコース(推定歩行距離4キロ)**を設定しました。ハーフコースは、高麗郷古民家で、休憩したのち、高麗駅へ戻ります。

フルコース(推定歩行距離7キロ)は、高麗神社を経て、高麗川駅を目指します。

高麗郷古民家⇒徒歩20分⇒聖天院(高麗王若光墓所)⇒徒歩10分⇒高麗神社⇒徒歩15分⇒JR 川越線高麗川駅(25分)→JR 川越駅16:30くらいから懇談会19:00解散

参加申し込みは、江口拓090-9300-4140 tectectac-1969@ezweb.ne.jp まで。

締め切りは、9月19日(金)です。



高麗駅の改札を出ると、目の前に、トーテムポールのような「天下大將軍・地下女將軍」の大木柱が現れ、ちょっと驚かされます。天下は、目に見える世界、地下は目に見えない世界を表し、すべての世界を守ること示しているそうです。

<かつての朝鮮半島では、疾病や災難をもたらす鬼神信仰があり、その魔除けのためのチャンスン(將軍票)という木製標を村落の入口に設置していた。異形相の人面の下に漢字が刻まれた木柱がバラバラに設置されていたが、現在の日本国内に設置されているものは「天下大將軍」「地下女將軍」と刻まれ、男女の標が対になったものとなっている> (ウィキペディア)

おそらく、この木票ほど大きいものは、日本国内にはないだろうと思います。

9月20日前後に、再度下見に行きますので、加筆します。